47　虎　三井親孝　一幅〔三の丸尚蔵館〕

紙本墨書　二三三・〇×一一六・〇
江戸時代（十八～十九世紀）

江戸時代に長崎へ来航した黄檗僧たちによって明代の書法が伝えられると、当時幕府が儒学を奨励し、儒学者や文人たちの間で中国趣味が広がっていたことと相まって、日本の知識階級の間であらためて唐様の書が流行をみせた。黄檗僧の独立性易に直接師事した北島雪山が江戸の唐様の祖とされており、さらに雪山に学んだ細井広沢が唐様を歴史的理論的に体系立てて多くの門人に教授したことで、一挙に唐様は広がりを見せることとなる。

平林惇信、関思恭、松下烏石とともにこの広沢門下の四天王と呼ばれたのが、三井親和（一七〇〇～八二）である。親和は信濃の出身で、字は孺教、通称は孫兵衛、名は親和、号に龍湖、万玉亭などがある。若くして江戸に出て、深川に住んだことから深川親和、深川漁夫とも名乗る。禅僧東湖のもとで学び、細井広沢に入門して趙子昂や文徴明の明代の書法を習得した。篆書や隷書、篆刻を得意とし、その篆書を染め抜いた反物は「親和染」と呼ばれ江戸で人気を博した。

そして、この親和の子で父に習い書家となったのが三井親孝（一七四五～一八一〇、一説には一八〇八）である。名は之孝、のちに親孝と改めた。字は徳孺、通称は半四郎、龍淵、游哉館と号した。父と同様に書と篆刻をよくしたが、書家としては親和ほど広く名を馳せることはなかった。型の踏襲を重んじる和様に対し、唐様は書き手の内面性を反映し個性を強く打ち出す点にその特徴がある。父と子がそれぞれ「龍」「虎（虎）」の一文字を大書したこの作品は、作者の気迫が如実に表れたような雄渾な筆が見どころであり、当時好まれていた書の風潮がよくうかがえる。

〈参考〉龍　三井親和　一幅〔三の丸尚蔵館〕

紙本墨書　二五三・五×一六三・〇
江戸時代、安永六年（一七七七）か

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録No.74

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
　　宮内庁書陵部
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency